

## カントにおける形態の問題

カントは「感性論」の初めに次のように述べている。「もし私が物体(Körper)の表象から、悟性がそれについて思考するもの、たとえば実体、力、分割可能性などを、同様に、感覚に属する物、たとえば不可入性、硬さ、色などを分離しても、私にはこの経験的直観からなほ或るものが、すなわち拡がり(Ausdehnung)と形態(Gestalt)が残存する。これらの拡がりとは形態は純粹直観に属し、純粹直観は感官あるいは感覚の現実的対象なしですら、感性の単なる形式として心(Gemüt)の内にア・プリオリに生ずるのである」<sup>1)</sup>。物体の拡がりとは形態は純粹直観に属するのであり、その純粹直観はそれだけで心の内にア・プリオリに生ずるものであるとされている。この場合の純粹直観とは時間ではなく空間のことであると考えられるが、空間は我々の心の内にア・プリオリに生じ、物体の形態はその空間の中に含まれていると言っているのである。

## 森 本 義 裕

このようなカントの思想は、感覚の非空間性の思想と表裏一体を成していると思われる。事実カントは感覚の非空間性について語っている。「感覚自体には空間に関する直観も時間に関する直観も見出されない」<sup>2)</sup>。あるいはまた、「色、音、温かさは感覚であつて直観ではない」<sup>3)</sup>とも述べている。もしも感覚がそれ自体としては非空間的であるならば、形態が純粹直観に属するという事は至極当然のことであろう。現象の形式は「すべての感覚と別個に考察されなければならない」<sup>4)</sup>とカントは言うが、それは純粹直観がそれだけで心の内に生じ、後に感覚を己れの内に取り込むからであり、質料と形式が本来は別々に生じているからであると考えられよう。本稿では、以上のような見通しのもとに、形態の問題を考察する。

「感覚自体はいかなる客観的表象でもなく、感覚自体には空間に関する直観も時間に関する直観も見出されない」と「知覚の予料」に述べられている。この発言は様々に解釈しうるものであるが、さしあたっては「感覚自体には空間に関する直観は見出されない」という部分に注目し、それを事実に基づいて理解したい。

感覚に対して空間表象をえられない場合を我々は時々経験している。たとえば色の感覚は、通常は最初から空間の中で見られるように思われるが、色に対して空間表象をえられない場合がある。我々がそれまでに行ったことのないレストランに初めて入る時、ドアを開けた瞬間に我々に飛び込んでくる印象は一つの絶対的統一体であり、そこには空間も時間も見出されない。そこには様々な色があるけれども、それらは寸分の隙もなくくっついていて、それらを互いに分離し或る関係において秩序づけ配置する空間は存在していない。ところが我々がそのような思った次の瞬間に、我々の心の内に純粹空間が生じてくるのである。このことを我々は生々しく意識している。この空間は我々の中から生じ、色に襲いかかってゆく。絶対的統一体として与えられた色において、我々は我々自身と色との間の距離を見出すことができない。色は我々の直前にあつて我々を脅かしている。ところが空間がそれらの色を順次に我々から遠ざけてゆくのである。レストランに入る時、我々はまず遠くにある白い壁を見出すかもしれない。この白はドアを開けた瞬間には

我々の直前にあつたのであるが、我々の内から生ずる空間がこの白を押しつけるのである。このようにして絶対的統一体の或る一部分が空間の適用を受けるが、その他は以前として我々の直前にあり、空間は順次に他の部分に適用されてゆく。白い壁が浮彫にされた時、その他の色は我々の真近にあるが、我々はやがて茶色の机や黒の仕切、青いカーテン、濃紺の絨毯などを我々から離れた場所に見出すのである。我々自身の内から生ずる純粹空間は、様々な色を押しつける時に人の歩く空間を作り出し、また、色と色とを引き離して個々の色を孤立させる。茶色の机の向こう側に黒の仕切を見出す時、この茶と黒はドアを開けた瞬間には我々の心の中で、いっしょになつてくっついていたのであるが、空間がこれらを引き離して入り込むのである。したがって机と仕切が離れて存在することになる。無論、引き離されずにいっしょになつたままにされておかれる色もある。たとえば、椅子に座っている人の顔には目の色、肌の色、口の色などがあるが、これらは分離されずに一つの顔の形態の中に入れられるのである。空間は絶対的統一体の或る一部分から次第に全体に適用されるが、その際様々な色に拡がり形態を与えながら色を引き離し、空間的諸関係の中に入れるのである。色自体は何ら拡がりを持たず形態をも持たないものであるが、空間が色を拡がりの中に入れ、また色に形態を与えるのである。硬さの感覚もまた、それ自体としては何ら空間性を有していないと言えるであろう。我々が暗闇で何かにつかる時、硬さの感覚は持つけれども、平たいとか角ばったとか丸いといった

ような表象はその瞬間にはえられない。ぶつかった瞬間には空間表象はえられないのである。ぶつかったと思つた次の瞬間に我々の心の内に純粹空間が生じ始め、硬さを空間の中に入れるのである。そこで我々は初めて「何か角ばつた物にぶつかった」などと思うのである。このような不意の場合でなくとも硬さには空間性がないことを我々は確かめることができる。たとえば我々が自分の前にある本に掌を当てる時、掌を当てた瞬間にはどうしても「平たい」とは思えない。視覚的には本の表紙は平たいのであるが、実際に掌を当ててみると別に平たいとは思えないのである。そうこうしている内に、何やら我々の心の内から空間が生じてきて硬さを己れの活動の内に取り込むのである。色や硬さにかぎらず、その他の感覚もよく分析してみると、それ自体としては空間とは別個に生じていることに我々は気づくであろう。カントが「感覚自体には空間に関する直観は見出されない」と言うのはもっともなことであり、それは事実によつて認められることなのである。

なお、純粹空間はそれ自体として生ずるけれども、我々はこれを感覚を混じえずにそれだけで直観することはできない。つまり純粹空間はその意味において抽象的な表現である。

## 二

感覚自体には空間に関する直観は見出されない、ということ将我々は具体的事実によつて確かめることができた。空間は感覚とは別個に生じ、後に感覚と合一するのである。けれども前

節では、空間が外延量としてのみ考察されていたと言ふことができる。外延量とは「部分の表象が全体の表象を可能にする（したがつて部分の表象が全体の表象に必然的に先行する）」量である。ところが前節において、「空間は絶対的統一の或る一部分から次第に全体に適用される」と述べたように、一瞬間のものである絶対的統一にさへ、すでに空間表象が存していると考えられるのである。前節ではこれについては触れなかったが、「絶対的統一の或る一部分」と我々が言うためには、あらかじめ絶対的統一を包括する全体としての空間が表象されていない（その空間内の感覚が非空間的であるにせよ）。カントは「感性論」においてそのような空間について語っている。「空間は、諸物一般の關係についてのいかなる論弁的概念、あるいは、よく言われるように、一般的概念でもなく、一つの純粹直観である。なぜなら、第一に、人は唯一の空間を表象しうるにすぎず、だから多くの空間について語る時には同一の唯一の空間の諸部分を理解しているにすぎないからである。これらの諸部分はまた、すべてを包括する唯一の空間の言わば構成要素（それからこの空間の合成が可能であるような）として、この唯一の空間に先行するのではなく、むしろこの唯一の空間の内では思考されるにすぎない。空間は本質的に唯一であり、空間における多様、したがつてまた諸空間一般についての一般的概念も、ただこの唯一の空間の制限に基づいている」。空間は唯一であるがゆえに純粹直観であるとされ、この唯一の空間は部分から合成されるのではなく、部分は唯一の空間の制

限として考えられている。この唯一の空間と外延量としての空間は一見すると矛盾するかの様に思われるが、そうではない。外延量としての空間はこの唯一の空間の中で働くと考えることが出来る。「我々が或る対象から触発されるかぎり、その対象の表象能力 (Vorstellungsfähigkeit) への作用は感覚である」。

我々の表象能力 (心) が何らかの対象によって触発され、その結果感覚が生ずる。この感覚を受容し表象する空間は唯一の包括的空間であり、そこに「現象の多様」が生ずる。これが感覚自体の表象である。この多様は多様であるにもかかわらず、さらに空間によって秩序づけられることなくしては多様とさえ認識されない絶対的統一体である。感覚自体は空間の中にあり、したがって我々は感覚自体に全体を意識しているが、しかし感覚そのものに空間的規定を見出し、<sup>(i)</sup> 空間が生じ、感覚を己れの活動の内に取り込むのである。包括的な空間は連続量であるが、我々はそのことを外延量としての空間の活動によって認識する。この活動は総合であり、外延量としての空間は包括的空間の中で総合的に成就される (先行する諸部分を連結してゆき、やがて全体を形成する<sup>(ii)</sup>)。カントは外延量を集合 (Aggregat) であると述べて、また連続量であるとも述べている。このことは別に矛盾していない。総合は中断しながら行なわれるものであり、たとえば、我々が机を見出し、その後でその向こうの仕切を見出す時、机を形成する総合が一度停止した後に空間は机から離れ、机と仕切を隔てる空間を形成し、そこでまた停止し、

次に仕切を描出する。けれども、総合が中断するとしても、空間と空間とが分離するわけではない。机を構成している空間とそれを取り巻く空間が分離しているわけではない。机の形態輪郭を構成する面は机の形態を構成している空間の限界として思考されるが、この面によって二つの空間は分離されない。このようにして外延量は集合にして連続量である。そして一方、机を構成する空間は、包括的な唯一の空間の制限として外側から限界づけられている。この限界づけは包括的な空間が連続量であることによって可能となるのであり、これによって我々は包括的空間の連続性を知るのである。外延量としての空間は包括的空間の中で活動を開始し、たえず限界づけられながら包括的空間の全体へと近づいてゆく。けれども外延量が構成する全体はどこまで行っても限界づけられた全体であり、包括的空間の全体とは異なる。我々はこのことによって包括的空間の唯一性を知るのであり、包括的空間は外延量としての空間なくしてはその包括性 (唯一性) をも認識されえない。

「外的感官 (我々の心の一つの固有性) を介して、我々は諸対象を我々の外なるものとして表象し、そしてこれらの諸対象を総じて空間において表象する。この空間において、それらの形態、大きさ、相互関係が規定されているかあるいは規定可能 (bestimmbar) である」。<sup>(12)</sup> 外的感官は心の固有性 (Eigenschaft) であり、その形式が空間である。この空間において形態、大きさ、相互関係が規定されている場合と、規定可能な場合未だ規定されていない場合とがある。心が何らかの対象によって触発

され、感覚が生じた時(触発する対象は外的感官を触発する)、心はその感覚を包括的な純粹空間によって受容する。ここに感覺自体というものが生ずるが、これは単に「主観的な表象」<sup>13)</sup>であり、我々是我々が触発されているということを意識するにすぎない。色、音、硬さ、温かさ、痛み等の諸感覚はいっしょにくっついて絶対的統一体を成している。そこに外延量としての空間がやはり外的感官の形式として生じ、諸感覚を互いに分離し秩序づける。この空間は温かさや痛みを包括的空間の或る場所に配置する。この作用は色を秩序づける作用と同時に行なわれる。包括的な純粹空間と外延量としての純粹空間は一緒に成って現象の形式を構成し、感覚は現象の質料となる。この質量は包括的空間とも外延量としての空間とも別個に生じる。外延量としての空間は、単なる主観的な表象としての感覺自体に諸形態を投げ入れ、また、単なる多様を客観的表象(規定された空間)において秩序づけるのである。

### 三

「対象として表象される空間(実際に幾何学において必要とされるような)は、直観の単なる形式以上のものを、すなわち、感性の形式にしたがつて与えられた多様を一つの直観的表象において総括することを含んでおり、それゆえ直観の形式(die Form der Anschauung)は単に多様を与え、形式的直観(die formale Anschauung)は表象の統一を与える。この統一を私は感性論においては単に感性に数え入れておいたが、それは、この

統一がすべての概念に先行するということを注意するためにすぎなかった。たとえこの統一が、感官には所属しないが、空間ならびに時間に関するすべての概念がそれによって初めて可能となる一つの綜合を前提としているにしてもである。というのは、この綜合を通じて(悟性が感性を規定することによって)空間あるいは時間は直観として初めて与えられるのであるから、このア・プリオリな直観の統一は空間と時間とに属するのであって、悟性の概念には属さないからである」<sup>14)</sup>。直観の統一によって概念が生じ、その直観の統一は綜合を前提しており、その綜合は感官には所属せず、悟性が感性を規定することだと言われている。そしてその綜合は、直観の形式によって与えられた多様を総括するものであり、直観の形式に綜合が加わることによって形式的直観が生ずるのである。先に唯一の包括的空間と言ったものは、直観の形式としての空間であり、そこに外延量としての空間が加わった時形式的直観が生ずると言いえよう。直観の形式も形式的直観も純粹空間であり、後者は幾何学において必要とされるものとされている。もとより感覺なしの純粹空間というものは、単なる抽象であり、現実には存しないであろう。純粹空間という表現は、その発生を考えた時のみ許される。直観の形式も形式的直観も感覺とは別個に生じているのである。直観の形式は悟性に基づく綜合によって規定されるが、この綜合は構想力の作用である。「綜合一般は……、構想力の単なる作用であり、魂のたとえ不可欠であるにせよ盲目的な機能の単なる作用であって、この作用なくしては我々はい

かなる認識もけつしてもつことはできないであらうが、しかし我々がこの作用を意識するだけでさえ稀である<sup>15</sup>。本稿では、意識するだけでさえ稀であるというその稀な場合を例にして考察を展開してきた。レストランの例がそれである。外延量としての空間は構想力の描出するものであり、感覚に対する空間の適用はすなわち把握(Aprehension)である。直観の形式としての純粹空間をその形式とする外的感官は、共観(Synopsis)において現象の多様を表象するが、この多様は絶対的統一体であり、構想力がこの多様を少しづつ把握してゆくのである。構想力は把握の綜合において印象を形象(Bild)たらしめる。

「構想力は、対象をその現在(Gegenwart)なしでさえ直観において表象する能力である<sup>16</sup>」。カントはこの定義の直後で、構想力は悟性概念に対応する直観を与えるために感性に属し、また、構想力の綜合は自發性に由来するために構想力は悟性にも属すると述べている。また、そのすぐ後に、構想力が自發性であるならば生産的構想力であり、そうでないならば再生産的構想力であるとしている。定義において考えられている構想力は明らかに生産的構想力であり、カントはこの定義における構想力に自發性を認めているのである。我々はとりわけ「直観において」という表現に着目しなければなるまい。生産的構想力(以下構想力と呼ぶ)は直観の能力であり、我々が普通想像力と呼んでいるものとは異なる。外延量としての純粹空間はこの直観の能力としての構想力が描出するのであり、何らかの対象を本来は存在していないのに現出させる。たとえば、全く形態を

持たない色自体としての茶色に机の純粹形態を投げ入れて茶色の机を現出させるのである。把握は、茶色的一部分から次第に全体を己れの活動の内に取り入れてゆき、そこに把握の綜合というものが必要となる。把握された茶色は拡がりの中に入るために当初の茶色とは異なったものとなるが、把握が移行した時にこの拡がりある茶色が再生産されることなくしては形象は生じない。そしてこの拡がりが再生産されるためには把握の純粹綜合というものが必要である。外延量としての純粹空間は把握の純粹綜合によつて生ずるのであり、先行する純粹空間が純粹再生されるのである。このような把握の純粹綜合の中で印象(茶色)の再生が行なわれるために拡がりある茶色が再生されることになる。把握は外延量を構成する純粹空間が直観の形式としての純粹空間を規定することであり、これによつて形式的直観が生ずるが、形式的直観を構成する把握の純粹綜合は、同時に諸感覚を直観の形式の或る位置に配置する。外延量としての空間は直観の形式を把握するのであり、この時に同時に感覚を把握するのである。把握は共観と異なつて、部分に意識が集中するため、共観よりも全体はばやけてしまう。したがつて印象の再生再生された表象はもはや印象ではないが)によつて先行する部分を補うことを要するのである。

#### 四

「大の概念は、一つの規則を意味する。その規則にしたがつて私の構想力は、四足獣の形態を、経験が私に提示する何らか

の唯一の特殊な形態や、あるいはまた、私が具体的に描出する (darstellen) ことのできるあらゆる可能的な形象に制限されることなく、普遍的に描くことができるのである。現象と単にその形式に関するこのような悟性の図式機能は、人間の魂の深みにおける隠された技術であり、この技術の真の手練 (Handwerk) をいつか自然から察知して明らかに明らかにすることは困難であろう<sup>19</sup>。構想力は、たとえば四足獣の形態を普遍的に描きうるものであり、経験がこれまでに提示してきた形態や、我々が想起したり創作したりするあらゆる可能的な形態に制限されることがない。この世に存在するあらゆる形態は魂が投げ入れたもののなのであり、我々はそれを後から自然から学ぶのである。我々自身の身体とでも同様であり、身体というものは本来存在していない。我々の内奥にある魂がこれを投げ入れるのである。このような構想力についてカントが明瞭に語っているのは、ここにあげた引用の一箇所だけであると思われる。おそらく当時の宗教事情によるのであろう。カントの構想力論は画期的なものであり、当時の社会には到底受け入れられないと考えたカントは、構想力の真相を極力隠したのである。すべての被造物は、実は感覚に構想力が形態を投げ入れたにすぎないものである、ということだけが強調されることになりかねない。無論カントは無神論者ではなく、あるいはまた汎神論者でもないが、浅薄な判断による誤解とそれから生ずるいざこざを恐れたのであると思われる。

我々が形態を描出する構想力の作用を自然から察知して明ら

かにすることが困難であるのは、我々が構想力の作用を意識することが稀だからである。「形象は生産的構想力の経験的能力の産物である」とカントが言う時、この「経験的能力」は把握のことを意味しているのであり、構想力が感覚という経験的なものに関わるがゆえにそう呼ばれるのである。そしてこの経験的能力を我々が明瞭に意識することは極めて稀なことであり、自然からその技術の真の有り方を察知し難い。あらゆる綜合の根底には「我思考す」という純粋な意識が潜んでいるが、この意識は通例極めて微弱であり、「綜合の意識」を通じてのみ己れの同一性を知り、綜合の諸部分に存した諸意識を統一し、自己を自覚することができ<sup>20</sup>る。したがって、構想力の綜合を意識すること(初めから明瞭に意識すること)は特別な場合を除いてはないのである。意識の統一は何らかの客観の概念における統一であり、たとえば構想力が何かの形態を描くと、その形態の概念において統一される。物体の形態とは物体の空間的輪郭のことであるが、この輪郭は単に物体の外周だけでなく、拡がりをも含んでいる。なぜなら拡がりなくしては外面をも表象することができないからである。そして外面なくしては線もなく、線なくしては点もない。つまり拡がりを表象する空間なくしては点もない。面は空間の限界であり、線は面の限界であり、点は線の限界だからである。したがって形態の概念は拡がりの概念を含んでいる。面や線や点が限界として思考されるにすぎないゆえ、空間は連続量と認識される。構想力は悟性にも属するものであるため、その描出する直観は言わば思考の直観であ

り、空間を描出する際、その空間を概念において思考する。物体の形態は一つの空間として確かに直観されていると同時に、概念的に思考されてもいるのである。

カントは「感性論」において形式的直観を取り扱っていると考えられ、「演繹論」(超越論的演繹論)以降において形式的直観の生成を扱っていると思われる。外延量としての空間は「直観の公理」で説かれるが、これは「演繹論」の内容と「原則論」の内容とが構想力の総合というものを扱うという点で共通しているからであると一応考えられる。本稿では、カントの思索の枠組を総括的に捉えることができず、形態問題を極めて狭い観点から捉えているにすぎない。魂と心の関係、意識の存在の理由、外的感覚と内的感覚の関係、感覚の区分(何が外的感覚で何が内的感覚なのか)等、あまりにも私にはわからないことが多すぎる。また、図式や概念についても詳論しえなかった。ただ、構想力が形態を描出するというだけでは言いえたと思われる。

### 註

カントからの引用はすべて『純粹理性批判』からのものであり、第一版をA、第二版をBとして頁数を示す。

- (1) A20f. B35.
- (2) B208.
- (3) B44.
- (4) A20. B34.

- (5) B208.
- (6) A162. B203.
- (7) A24f. B39.
- (8) A19f. B34.
- (9) A20. B34.
- (10) Vgl. A163. B204.
- (11) Vgl. A170. B212.
- (12) A22. B37.
- (13) B207.
- (14) B160f.
- (15) A78. B103.
- (16) B151.
- (17) Vgl. B151f.
- (18) A141. B180f.
- (19) カントは形象と言っているが、形象の根底には純粹形態がある。そして、この純粹形態においては像の裏側も漠然とではあるが表象されているのである。純粹なものは感覚の中でも感覚を貫いて直観されるのである。
- (20) A141. B181.
- (21) Vgl. B133.

\* 本稿は、日本哲学会第45回大会(昭和61年5月、引前大学)における研究発表「カントにおける色と空間」を基にし、新たに執筆したものである。

(もりもと・よしひろ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)